

I 2015年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2015年度大学評価結果総評】

能楽研究所が、学際的・国際的な能楽研究拠点にふさわしい体制を整えるために、定期的研究会の開催を始めとした研究成果の着実な蓄積、社会貢献の一環としてのデジタルアーカイブの資料群の整備や各種セミナーの開催などを含めて非常に意欲的な取り組みを日常的に続けている点は高く評価できる点である。こうした研究資源や研究活動の成果を、引き続き、国内、海外に積極的に発信していくことを大いに期待したい。

【2015年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】（～400字程度まで）

研究所の日々の活動とその成果を十二分に評価していただけたことに感謝しつつ、2015年度も研究拠点としての活動成果を国際研究集会、資料展示、複数回のシンポジウム等で発信した。研究所単独ではなく、日本演劇学会と共催の「古典劇の現代上演」をテーマとする研究集会実施、国立能楽堂や慶應義塾大学ス道文庫との協力による相互に関連性のある展示など、広く外部と繋がる工夫をしている。ベルギーの演出家による英語の講演（通訳付き）の企画、建築学、音楽情報工学、ロボットデザイン等の研究者との研究協力など、新しい試みも始めている。

II 自己点検・評価

1 研究活動

【2016年5月時点における点検・評価】

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 研究所の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

2015年度の活動状況について項目ごとに具体的に記入してください。

①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等）

※2015年度に実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。

- 1) 英語版能楽事典編集のための国際研究集会 7月23、24日 BT A会議室（参加者のべ59名）
- 2) フランソワ・ラショウ教授講演「世界劇場—イエズス会士と日本の演劇に関する一考察」
7月24日 BT A会議室 能楽学会との共催。（参加者44名）
- 3) シンポジウム「わが継承の歴史と現在—身体・記譜・共同体」9月13日 S505（参加者67名）
- 4) 日本演劇学会秋の研究集会「古典劇の現代上演」 10月24、25日 スカイホール
シンポジウム「古典演劇・伝統演劇の復元的上演はどこまで可能か」
パネルセッション「能の復元的上演の可能性—「能」を現代に蘇らせる手法—」
特別講演「バロック演劇における歌う身体」（以上、参加者のべ204名）
- 5) 資料展示「慶長文化の精華 光悦謡本の世界」 2月17日～3月31日 ※日・祝日休館
BT14階 博物館展示室（参加者のべ170名）
- 6) 研究集会「縦断横断 光悦謡本」 2月27日 スカイホール（参加者80名）
- 7) シンポジウム「近世大名の能道具が語るモノガタリ」 3月6日 スカイホール（参加者90名）

【根拠資料】※ない場合は「特になし」と記入。

・ジャーナル5号

②対外的に発表した研究成果（出版物、学会発表等）

※2015年度に刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者、内容等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者、内容等）の詳細を箇条書きで記入。

*研究所としての刊行物 <http://kyoten-nohken.ws.hosei.ac.jp/publications/>
<http://nohken.ws.hosei.ac.jp/publications/nohgaku.html>

*専任所員の研究成果

山中玲子「能の「習事」と番組上の小字注記—「小書」という語の意味するところ」（『能楽研究』40号）

「能〈通小町〉遡源」（『国語と国文学』93巻3号）

「小書の呼称と池内信嘉」（『鍊仙』）

“Fraternizing with the Spirits in the Nō Plays Saigyō-zakura and Yamanba” (Ca’ Foscari, Japanese Studies *The Rethinking Nature in Japan: from Tradition to Modernity*) ほか

<p>宮本圭造『能面を科学する』（共著、勉誠出版） 「面打井関考」（『能楽研究』40号） 「笛役者伊藤安中伝」（『国立能楽堂調査研究』10号） 「伏見稲荷大社御旅所の能舞台」（『朱』59号） 「一橋徳川家の能楽」（日本芸術文化振興会『一橋徳川家と能』）ほか</p>
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし</p>
<p>③研究成果に対する社会的評価（書評・論文等）</p>
<p>※研究所の刊行物に対して2015年度に書かれた書評（刊行物名、件数等）や2015年度に引用された論文（論文タイトル、件数等）の詳細を簡条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・芸能史研究において最も権威ある学会誌『芸能史研究』の書評欄である「芸能史の書棚」に、2014年度に研究所が刊行した三冊の能楽資料叢書『大蔵虎清問・風流伝書』『金春安住集』『秋田城介型付』が取り上げられ、「貴重な研究資料として学界に寄与する」として高く評価されているほか（2015年10月刊の211号）、専任所員の1名が執筆した論文、およびシンポジウムの内容を取めた書籍が同誌の紹介欄に取り上げられている。個々の論文の引用状況は追いきれていないが、いくつか例を挙げるなら、ハンガリーのエトヴェシュ大学出版局で発行された『Encontres with Japan』には、専任所員1名と兼担所員1名の著書がそれぞれ1本ずつ、ドイツで刊行された『Raume der Erscheinung und Transformation』には専任所員2名の論文がそれぞれ3本、1本引用されている。また、国内では、日本美術史における最も権威ある学術誌『國華』の「特輯 能面」（上・下）（2015年1月・6月刊）には、専任1名の論文7本が引用されており、参照すべき業績として国内外で高く評価されていると言える。 ・日本経済新聞2015年12月9日朝刊「知の明日を築く」が能楽研究所を取り上げ、豊富な貴重資料や文理融合の所作研究、弘化勸進能の上演空間の再現、英語版能楽全書の編纂計画等を紹介している。
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし</p>
<p>④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）</p>
<p>（～400字程度まで）※2015年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。</p> <p>外部評価は受けていないが、文部科学省の共同利用・共同研究拠点として毎年細かなチェックを受けている。特に2015年度にはアドバイザーの施設訪問があり、アドバイスを受けた。2013年度からのスタートアップ支援の事後評価報告書を提出済みである。5月中にヒアリングのうえ、評価が出る。</p>
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業～スタートアップ支援～」事後評価報告書</p>
<p>⑤科研費等外部資金の応募・獲得状況</p>
<p>※2015年度中に応募した科研費等外部資金（外部資金の名称、件数等）および2015年度中に採択を受けた科研費等外部資金（外部資金の名称、件数、金額等）を簡条書きで記入。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2015年度中に応募した科研費等外部資金 学術研究振興資金「能楽の国際参照標準確立と多面的展開研究」（採択。140万円＋学内予算308万円） 科研費基盤研究(B)「能楽及び能楽研究の国際的定位置と新たな参照標準確立のための基礎研究」（研究代表者・山中玲子、採択。2016年度390万円） 科研費基盤研究(A)「伝統芸能文楽の技をヒューマンロボットインタラクション技術へ適応させるデザイン研究」（研究代表者・中川志信、採択。研究分担者・山中玲子ほか） ・2015年度中に採択を受けた科研費等外部資金 科研費基盤研究(B)「能楽資料データベース構築に向けた金春家文書の総合的研究」（研究代表者・宮本圭造、2015年度220万円）
<p>【根拠資料】 ※ない場合は「特になし」と記入。 ・特になし</p>

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における2015年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、簡条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

(3) 現状の課題・今後の対応等 (任意項目)

※(1)～(2)の内容を踏まえ、現状の課題および今後の対応等について箇条書きで記入。課題がない場合は「特になし」と記入。

・特になし

【この基準の大学評価】

能楽研究所は、2015年度研究拠点の活動成果として、国際研究集会、資料展示、複数回のシンポジウム等で国内外に発信したことは、そのプレゼンス向上にとって非常に有意義であり、高く評価できる。また、単独でなく各種の関係機関や団体、特に建築学、音楽情報工学、ロボットデザイン等の異分野の研究者と連携し、斬新な試みに意欲的にチャレンジしている点は、優れた取り組みであり今後の継続と進展を期待したい。

外部評価としては受けていないが、文部科学省の共同利用・共同研究拠点としてのチェックを毎年受けており適切である。

科研費等外部資金の応募・獲得状況において、関係者が科研費の基盤研究(A)、(B)を獲得しており、研究を推進する基盤とエネルギーになっていると考えられ、今後のさらなる研究の推進とその成果の国内外への発信を期待したい。

2 内部質保証

(1) 点検・評価項目における2015年度の現状

2.1 内部質保証システム(質保証委員会等)を適切に機能させているか。

①質保証活動に関する各種委員会は適切に活動していますか。

【2015年度における質保証活動に関する各種委員会の構成、活動概要等】※箇条書きで記入。

専任所員と兼任所員は毎週研究遂行上の問題を話し合い、担当事務および研究開発センターとも密接な連絡をとりあって業務を進めている。

専任所員2名と3学部(文・デ工・国際文化)の教員から成る運営委員会(月1回開催)では、上記の研究活動や日常業務で生じる問題があれば報告し、対応策や改善策を討議している。また、外部機関との連携、社会還元等に関する取り組みやその成果についても報告をおこない、さらなる発展のためのアドバイス等を受けている。

2015年度は、能楽研究所の「服部基金」の運用や基金取り崩しの可能性について、基金の委員会で決まった方針に対して研究所運営委員会から多くの疑義が出たため、再検討されることとなった。運営委員会が「質保証活動」の担い手として十分に機能していることを示す事例と考えている。

(2) 特記事項

※上記点検・評価項目における2015年度新規取り組み事項および前年度から変更や改善された事項等について、箇条書きでそれぞれの概要を記入。ない場合は「特になし」と記入。

内容	点検・評価項目
・特になし	

【この基準の大学評価】

能楽研究所では運営委員会を月1回開催しており、研究所の運営に関する報告を行うとともにアドバイス等を受けており、適切に運営されている。「服部基金」の運用においても、運営委員会からの意見を踏まえ対策を審議しているのは評価できる。

【大学評価総評】

能楽研究所は、研究・教育活動実績として、国際研究集会、資料展示、複数回のシンポジウム等で国内外に発信したことは、非常に有意義であり高く評価できる。各種関係機関や団体と連携し発表している研究成果は対外的に高く評価されている。また、芸能史研究や各種論文が学会誌や学術誌に掲載され高い評価を受けていることも優れた成果である。今後のさらなる発展を期待したい。

科研費等外部資金の応募・獲得状況は、関係者が科研費を獲得しており、高く評価できる。

質保証活動については、運営委員会を月 1 回開催しており適切に運営されている。